

Cullaniddesa の頭陀支

阿 部 慈 園

I. Cullaniddesa (Cūḷa-, 小義釈, CNd.) が挙げる頭陀支 (dhutaṅga) は、タイ版 CNd.¹⁾ に依つて、従来 13 支とされてきた²⁾。すなわち、

(1) **pamsukūlikaṅga** (糞掃衣支) (2) **tecīvarikaṅga** (三衣支) (3) **piṇḍa-pātikaṅga** (常乞食支) (4) **sapadānacārikaṅga** (次第乞食支) (5) **ekāsani-kaṅga** (一坐食支) (6) **pattapiṇḍikaṅga** (一鉢食支) (7) **khalupacchābha-ttikaṅga** (時後不食支) (8) **ārañṇikaṅga** (阿蘭若住支) (9) **rukkmamūli-kaṅga** (樹下住支) (10) **abbhokāsikaṅga** (露地住支) (11) **soṣānikaṅga** (塚間住支) (12) **yathāsanthatikaṅga** (隨得敷具支) (13) **nesajjikaṅga** (常坐不臥支)

の 13 である。それらは、衣 (1-2)・食 (3-7)・住 (8-12)・精進 (13) の配列順序になつており、南方上座部の頭陀支の確定説³⁾と同型である。ただし、それらは 13 頭陀支として単独に言及されておらず、それらの前には rūpa (色) 等の 5 [境]・kula (家) 等の 3・lābha (利得) 等の 4・cīvara (衣) 等の 4 [依]・suttanta (經) 等の 3 [藏] の 19 項目が述べられ、また後には 4 [禪]・4 [無色] の 8 項目の、総計 40 項目中の 13 として挙げられている⁴⁾。

PTS 版 CNd. も、これと同じい 13 支を、その本文中に挙げている⁵⁾。

しかし、ビルマ版及びセイロン版 CNd. は、タイ版の 13 支の箇所に、8 支を挙げて⁶⁾。そして、その 8 支は Mahāniddesa (大義釈, MNd.) の 8 支と全同である。さらに、PTS 版が用いた二つの写本 (ビルマ系・セイロン系) の読みは、前述の 13 支・8 支とは、また別の頭陀支を伝えている⁷⁾。また、CNd. の Atṭhaka-thā (CNdA.) の記述⁸⁾は、タイ版の伝承を支持せず、むしろ他の伝承を支持している。

従つて、CNd. の頭陀支には、13 支以外の伝承がいくつかあつたことが知られる。本稿の目的は、CNd. における 13 支以外の頭陀支の紹介と、それについての若干の考察を試みることである。

II. CNd. は、MNd. と併せて Niddesa (義釈, Nd.) と称せられ、両者は密接な関係を有するから、まず MNd. の頭陀支を概観することから、その考察を始め

よう。

MNd. は、頭陀支を次の 13 ケ所 (筆者の調べた限りでは) に説く。いずれも 8 支と認められ、その内容から大きく、次の 2 群に分類できる。(出典は、PTS 版のページ。＝は同文、≡は同類文を示す)

(1) vata (vatta) の説明として、あるいは 8 支単独に、
66=476, 188, 238⁹⁾, 396¹⁰⁾

(2) 三蔵師・四禪四無色定者等と併記されて、
68=69=218=389¹¹⁾, 231≡393¹²⁾, 263¹³⁾, 349

また、(1)' 頭陀支 (e. g. āraṇṇikaṅga), あるいは (2)' 頭陀者 (e. g. āraṇṇika) としてあらわれる別から分類すれば、

(1)' 66=476, 188, 263

(2)' 68=69=218=389, 231≡393, 238, 349, 396

となる。そのうち、p. 66, 188, 476 の 3 ケ所は、特に “aṭṭha dhutaṅgāni (8 頭陀支)” と明示している。このことは、Pāli Vinaya, Nikāya 等で種々に説かれる頭陀支の一つの定型を示すであろう¹⁴⁾。また、“dhutaṅga” というタームは、MNd. に至つてはじめてあらわれる語のようである¹⁵⁾。

MNd. の 8 支を、次に略号を用いて表わして見よう。

ā · pi · pa · te · sa · kh · ne · ya

前述の如く、ビルマ版及びセイロン版 CNd. は、これと同型の 8 支を挙げる。また、その前後の項目 (19 と 8) を併せて比較すると、MNd. (p. 263) のそれと一致する。この、ビルマ・セイロン両版 CNd. (それぞれ p. 170・p. 360) と MNd. (p. 263) の列挙項目がおのおの一致することは注目される。

III. さて、PTS 版 CNd. にて校訂者 W. Stede が用いた二つの写本 B^r (ビルマ系)・S^e (セイロン系) の伝える頭陀支は次の如くである。

B^r(8): **ā · pa · te · pi · sa · kh · ya · ne**

S^e(10): **ā · pa · te · pi · sa · ek* · pat* · kh · ya · ne**

この二つの頭陀支が、何らの意図なく配列列挙されたものでないことは明らかである。まず、B^r は、MNd. の 8 支と同項であり、また第 2 支以下は衣・食・住等の順序に配されていることが指摘される。ā が第 1 支に止められているのは、それが全頭陀支の代表支とも言われるべく、また古型を維持するほとんど全ての頭陀支の冒頭に置かれるからであろう。次に、S^e の 10 支は、B^r の 8 支に **ek** と **pat** の 2 支が加えられた型となつている。これで食支の全 5 がそろふことになる。

S^o も, B^r 同様, ā を第 1 支に配している。

さらに, S^o とタイ版 13 支 (CNd. T) とを比較してみよう。

S^o(10): ā · pa · te · pi · sa · ek · pat · kh · ya · ne

CNd. T(13): pa · te · pi · sa · ek · pat · kh ·

ā* · ru* · ab* · so* · ya · ne

ā が, 住支群の最初 (第 8 支) に配され, そのすぐ後に **ru · ab · so** の 3 住支が加えられた型がタイ版 CNd. である。これで, 衣・食・住・精進の完全な配列順序を持つ 13 支型ができる。

ここで, 前述 3 型, MNd., および CNd. ビルマ版 (B)・同セイロン版 (S) の頭陀支を支数の少ないものから順に図示してみよう。

	衣		食					住				精進	
	pa	te	pi	sa	ek	pat	kh	ā	ru	ab	so	ya	ne
MNd.	3	4	2	5			6	1				8	7
CNd.	B・S	3	4	2	5		6	1				8	7(=MNd.)
	B ^r	2	3	4	5		6	1				7	8
	S ^c	2	3	4	5	6	7	8	1			9	10
	T	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12

CNd. B・S は MNd. の 8 支をそのまま採用し, B^r はそれを配列し直した型と見られる。また, B^r・S^o・T 間には支分の増広が認められるから, B^r・S^o の両型は MNd. (8 支) と CNd. T (13 支) のまさしく中間に位置する頭陀支型と見られよう。

IV. このことに少しく関連する記述が, Vim. (解脱道論) に見られる¹⁶⁾。取意すれば,

13 頭陀支は 8 支につづめられる。何となれば, (i) 8 頭陀支は『毘曇 (Chos mñon pa)』にて説かれるところであるが, (ii) **kh** は **pat** と **ek** を包摂し, (iii) **ā** は **ru · ab · so** を包摂する, からである。

と。この (ii) の説が, B^r・S^o 間に認められ, (iii) の説が, S^o・T 間に認められる。また, 『毘曇 (Abhidhamma, Abhidharma)』とは『義釈 (Nd.)』を指す¹⁷⁾から, (i) の記述は, MNd. のみならず, CNd. B・S (あるいは B^r) の 8 支を支持するであらう。

以上より, (なお伝承間の歴史的考察の検討が必要とされるが) 一応 CNd. の

頭陀支は、タイ版 13 支のほか、次の三説の伝承があつたと見てよいであろう。

(1) CNd. BS(8): **ā · pi · pa · te · sa · kh · ne · ya**(=MNd.)

(2) CNd. B^r(8): **ā · pa · te · pi · sa · kh · ya · ne**

(3) CNd. S^c(10): **ā · pa · te · pi · sa · ek · pat · kh · ya · ne**

V. さらに、このことを傍証する CNdA. の記述 (p. 70) を次に示そう。

Āraññaṅgādhimutto ti ādini dhutaṅgasamādanavasena vuttāni. (阿蘭若住支を志向する者云々とは、頭陀支の受持に関して [CNd. にて] 説かれたものである)

この文より、CNdA. の作者 (Upasena) が見た CNd. 本文には、“**āraññaṅgādhimutto**”¹⁸⁾の語が、頭陀支に関する項目群の第 1 にきていたことは明らかであろう。故に、CNdA. の見た CNd. の第 1 支は **ā** であると言えよう。ただし、CNdA. は支数を明示していないので、8 支か 10 支か不明であるが、少なくとも **pa** を第 1 支とするタイ版 CNd. の 13 支ではなく、前章 VI で述べた (1), (2), (3) のうちのどれかを支持することは明らかであろう。このことから、**ā** を第 1 支に持つ CNd. の頭陀支の伝承があつたことが知られる。

VI. さて、タイ版 CNdA. も

Āraññaṅgādhimutto ti ādini dhutaṅgavasena vuttāni¹⁹⁾。

と述べて、**ā** を第 1 支とする CNd. テキストに依つており、これは **pa** を第 1 支とするタイ版 CNd. の記述と明きらかに違背する。何故に両者の記述は相違するのであるのか？

それは、水野弘元博士が、

元來底本たる暹羅本 [CNd.] の原本となつたものが既に相當の誤傳誤寫を有したものでら
しく、……²⁰⁾

と指摘される如く、タイ版 CNd. の原本に混乱があつたようである。本稿では、頭陀支に関して、タイ版 CNd. ・同 CNdA. 間にその記述の相違が認められることを指摘するに止め、詳細は後日に期したい。

VII. 上來考察したところより、次のことが確認される。

- (1) CNd. の頭陀支は、タイ版の伝える 13 支のみではなく、(i) ビルマ版・セイロン版の 8 支 (MNd. と全同)、(ii) ビルマ系写本 (B^r) の 8 支 (MNd. と同項)、(iii) セイロン系写本 (S^c) の 10 支、の三つの伝承が認められること。
- (2) また、それらには増広関係が認められ、特に (ii)、(iii) は、MNd. 8 支とタイ版 CNd. 13 支の中間的頭陀支型とも見られること。 (6-8-1980)

註 (パーリテキストの出典は、特記のない限り、PTS 版による)

- 1) Cūḷaniddesa, Vol. 30, 2nd ed. 1959 (B. E. 2502, 1st ed. 1972=B. E. 2470), p. 231.
- 2) 水野弘元「大乘經典と部派仏教との関係」(『大乘仏教の成立史的研究』所収, p. 303, 309); 早島鏡正『初期仏教と社会生活』, p. 78. 3) Milindapañhā (Mil.), p. 359; Vimuttimaggā (解脱道論, Vim.), 大正 32. 404bc: Tib. Vim., Bapat 本, p. 4, 6; Visuddhimaggā, HOS 本, II-2; なお Upāsakajanālaṅkāra, p. 247 参照。4) CNd. の頭陀支が単独ではなく(また, Mil. 等に説く如く, “terasa dhutaṅgāni” と総称しておらず), 40 項目中の 13 として挙げられているのは注目される。Theragāthā (vv. 844-856) の頭陀支 (18 項目中の 13 支) に関して, 中村元博士の説参照(『原始仏教の成立』中村元選集・第 12 巻, pp. 325-327). 5) Cullaniddesa, ed. by W. Stede, 1918, p. 250. Stede は, この 13 支をタイ版に依る。なおこのタイ版は 1894 年刊本か?(筆者未見。水野弘元『パーリ語文法』, p. 212 参照)。また, 同 p. 250 にて *l. 4 paṃsukūli-kaṅkhā* 'dhimutto→*paṃsukūlikaṅgādhimutto*, *ll. 4-5 teciṇvari-kaṅkhā* 'dhimutto→*tecīvarikaṅgādhimutto*, *l. 6 khala*→*khalu*^o, *l. 7 araṇṇi*^o→*āraṇṇi*^o?, *l. 8 yatha-saṇṭhati*^o→*yathāsanthati*^o と読むべきであろう。6) (ビ) 第 6 結集版 (1962), p. 170; (セ) BJT 版 (1976), p. 360; また, ナーランダー版 (1959) もビルマ版にならう (p. 180)。7) *ibid.*, p. 250, footnotes 2-5. 8) Saddhammapajjotikā, ed. by A. P. Buddhadatta, 1940, p. 70. 9) 同ページに 3 回。ただしそのうち 1 回は最初の **ā** と最後の **ya** を挙げるのみ, 他は省略。10) 校訂者 L. De la Vallée Poussin および E. J. Thomas は **sa** を除く 7 支を挙げるが, 同ページ footnote 5 の B^p (ビルマ系写本)・S (セイロン系写本) の読みを取る。1926 (B. E. 2469, 2nd ed. 1967=B. E. 2500) 年刊行のタイ版 MNd. (p. 481)・ビルマ版 (第 6 結集版, 1962, p. 310)・セイロン版 (BJT 版, 1961, p. 548) も **sa** を加えた 8 支。Poussin 等の依つたタイ版は 1894 年刊本か?(筆者未見) 11) **ā** を挙げるのみ。なお, p. 71 (全支省略)。12) Poussin 等は **pi** を除く 7 支を挙げるが, footnote 5 の読みを取る。タイ版 (p. 477)・ビルマ版 (p. 308)・セイロン版 (p. 544) も **pi** を加えた 8 支。註 10) 参照。13) 永崎亮寛氏 (高野山大学助手) の御教示。14) cf. Vim. (大正 32. 406b: Tib. Bapat 本, p. 70)。また, P. V. Bapat: Dhutaṅgas, I. H. Q., Vol. 13, 1937, pp. 46-47; 阿部「Pāli Vinaya における頭陀説」(『印仏研』28-2) 参照。
- 15) “dhutaṅga” と “dhutaṅga” (また “dhutadhamma”) との比較検討は後日の課題としたい。Bapat 前掲論文 p. 47, footnote 1 参照。16) *ibid.*, 大正 32. 406b: Tib. Bapat 本, p. 70, 72. 17) 南伝 42, 目次 p. 1 参照。18) D. Kosambī に依れば, “āraṇṇika” はビルマ綴り (仮にビルマパーリと名づく), “āraṇṇaka” はセイロン綴り (同セイロンパーリ) と言われる。(Vis. HOS 本, p. 615.) 19) Saddhammapajjotikā, Vol. 2, 1921 (B. E. 2464), p. 298. ただし, “dhutaṅga” の後に “samādana” の語を欠く。前章 V の引用文参照。20) 南伝 44, 目次 p. 2. cf. Cullaniddesa (PTS 版), Introduction.

(東京大学大学院・Ph. D.)